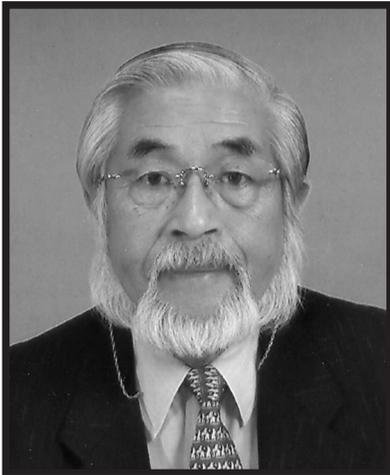


故・奥平忠志先生を偲ぶ

大内 定



故 奥平 忠志 元会長

本会元会長、奥平忠志先生は、2007年8月24日、多臓器不全のため札幌の病院で逝去された。ご病気の要因は、先生がJICA（国際協力機構）専門委員としてトルコ国アルトヴィンにご滞在中の2007年3月13日、ご視察中に屋外で階段から落下という不慮の事故に遭われたためで、人事不省のまま現地で治療後、翌4月5日にご子息・理氏に付き添われてご帰国、直ちに札幌の病院で治療を続けられたが、ご病状は回復されなかった。

本会はもとより、北海道の地理学界にとって先生の存在とご指導は誠に大きく、またその衝撃的なご逝去の経緯を思うとき、ただ残念というより学界で何か頼りになる大きな先輩を失った空虚さを感じた次第である。私事、先生とは大学でも後輩に当たり、先生には専らご指導いただいたり、お世話になったりしっぱなしで、先生への碑文を記すことは大変憚れるが、先生のご略歴、ご研究歴と本会へのご指導などを概略記すことをお許し願いたい。

先生は、1931年3月23日、函館市にお生まれになり、函館中部高等学校をご卒業後、東北大学理学部地学科（地理学専攻）に進まれ1958年3月にご卒業、直ちに北海道函館西高等学校教諭として赴任され、その後1962年4月に函館工業高等専門

学校講師に転任された。この間、一貫して地理学研究と地理教育を進められ、1969年4月に北海道教育大学講師（函館分校）に着任された。以後、大学において地理学研究と学生教育に携わられ、1999年3月、北海道教育大学教授職（函館校）を定年まで2年を待たずご退官、直ちに4月に札幌国際大学教授（観光学部長）として招かれ、2004年3月、札幌国際大学観光学研究科長を最後に同大学を定年退職された。この間、北海道教育大学函館校におかれては分校主事として大学運営の要職も務められ、また札幌国際大学におかれては草創期の観光学部長・観光学研究科長として学部・研究科を軌道に乗せることに奔走された。

先生のご専門は、人文地理学の都市地理学・経済地理学といわれるが、多数のご研究からはもっと広範囲であり、とても全容は紹介し切れない。強いてまとめると、一つには、都市構造の研究（例えば、「函館市の都市構造の概説的展望」人文論究28、「港湾と都市の変遷－小樽市の場合－」東北地理28-2、等々）や、工業地域の特性の研究（例えば、「苫蘭工業地域の特性」東北地理18-2、「函館地区の工業の特性」亀谷先生退官記念誌）と物資の流動に関する研究（例えば、「函館市における物資流動」函館工業高等学校紀要4）などで、北海道の都市や工業を「辺境」ゆえの地域性や地域間格差の問題として提起されたものである。二つには、北海道内の地域調査や「僻地」調査（例えば、「檜山地方の僻地性」僻地教育研究35、「青函インターブロック交流圏構想」地域開発324）などから、地域変化の観点から地域間格差解消に多くの提言をされたもの、があるように思う。

さらに、先生は1978年に在外研究員としてオーストラリア・モナシュ大学にご留学以後、研究対象は、オーストラリアはもとよりカナダ、アメリカ、ヨーロッパなど広く海外へも向けられ、海外の都市構造や地域性（例えば、「オーストラリアの首都・キャンベラの都市化」北海道地理53、「アイダホ州州都ボイジーの特性」人文論究58）

を日本と比較することによって政策的提言（例えば、「地域の経営と人文地理学」月刊経営労働28-323）をされた。先生のご研究の根底にあるものは、地域の産業を発展させ地域活性化をどう図るか、地域間格差を解消するにはどうするか、地域間のネットワークをどう構築するか、の3つの観点があり、1982年からの社団法人「北海道地方自治研究所」、1991年「北海道歴史を生かすまちづくり推進委員会」、2003年「北海道遺産構想推進協議会」などの役員として社会的にも積極的に活動された。そして最後のお仕事は JICA の専門委員（トルコ国観光振興）であった。

本会でのご活躍に関して、本会は数年に一度、秋季大会を東北地理学会と共催しているが、函館開催が多く、巡検も含め先生はその都度開催に尽力された。本会単独での函館開催もある。とくに印象に残ることは、1979年10月「青函トンネルと函館圏」と題した青函トンネル工事先進導坑先端切羽までの見学（一度限りの機会）巡検と、1983年9月「道南日本海岸の自然と人文」、1996年9月「道南の歴史的風土」と題する各巡検で、先生のご奔走により実現され、先生の名調子のご説明が強く印象に残っている。先生は1995～96年度の本会の会長を務められ、本会の発展のため尽力された。当時、本会事務局の仕事に携わっていた私事、東北地理学会との共催や各秋季大会巡検企画、会員入会促進対策では多くの助言とご指導をいただいたが、後者に関してはアドバイスを十分生かし切れなかったことが悔やまれる。

先生は、大変気さくに誰にでも話しかけ、物腰が柔らかく、また細かいところに心配りがあり、一度接したことがある人は、見事なお髭顔と同時に本当に紳士中の紳士であられたことには異論のないことと思う。

大学でのご研究と教育に一区切りを付けられ、国際協力のお仕事に、またNPO法人（「どうなん『学び』サポートセンター」、「NPOサポートはこだて」）の地域活動にと、ご活動を本格化されて間もない時期でのご逝去で、先生ご自身もご無念であったと推量し、残されたわれわれもまだまだご指導いただけるはずだったのに、と思いは尽きない。

謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

付記

なお、先生のご逝去後、奥様のご意志により、先生没後一周年記念として友人の萩本和之氏が先生の新聞寄稿や著作、ご遺族・友人の寄稿を編集して『マイ・ウェイ 奥平忠志 道南を愛し、自分を信じて疾走したひげの名伯楽』と題した本が、2008年8月24日に自家出版されました。先生のお考え、お人柄がよく偲ばれる本です。

奥様・洋子様は、札幌市豊平区福住にお元気で住まいです。

（写真提供：奥平 洋子様）